日本の殉教者

徳川時代、鎖国政策は二百年以上続いたが、外国からの圧力で、やっと一八五八年に通商条約が結ばれ、外国人寄留地に教会が建てられるようになった。

一八六五年三月十七日、長崎の大浦天主堂のプチジャン神父のもとに、役人がいないことを確認して一人の婦人が駆け寄った。

「私たちは皆、あなた様と同じ心を持っています。サンタ・マリアの御像はどこ？」

二百年以上、一人の司祭もいない中、信仰を守り続けてきた隠れキリシタン発見の瞬間である。私はこの場面を想像するたびに胸が熱くなる。

しかし、キリスト教禁止令は続いており、隠れキリシタンは捕えられ、全国各地に流刑された。津和野の乙女峠もそのひとつで、日本各地で殉教者が出た。

が、日本の殉教者のほとんどは徳川時代初期の一六三九年までに集中しており、その数は五千人とも一万人ともいわれる。

カトリック教会では殉教や信仰生活を通してキリストの告げた福音を生き抜き、信仰生活の模範となった人を「聖人」「福者」として賛えている。（福者は聖人の前段階）

日本には一八六二年に列聖された二十六聖人（長崎市西坂に記念碑がある）と、一九八七年に列聖された十六人、合わせて四十二人の聖人がいる。福者は二百七人。

今回、新たに日本の殉教者の中から百八十八人が列福される。

南ポルトガル巡礼で訪れたエボラの大聖堂を、天正少年使節団が訪れてそこでパイプオルガンを弾いたことを初めて知った。

四人の使節の中のひとり、中浦ジュリアンが今回、列福される。

帰国後、中浦ジュリアンをはじめ日本の殉教者について調べてみたが、殉教者について自分が無知であったことを思い知らされた。

殉教者を美化する気持ちは全くない。ただ、日本には聖人にも福者にもなっていないのひとつの指針として生きねばならないと思ったのである。

それが、歴史を生きるということではあるまいか。エボラで天正少年使節団が弾いたパイプオルガンを見たことの中に巡礼の意味があった。

さて、エボラで訪れたもうひとつの教会、サン・フランシスコ教会。そこには壁や柱などすべてが人骨で造られた礼拝堂があった。

五千人以上の修道者の骨で造られた〝人骨堂〟は、ゲテ物趣味や興味本位のものではなく、修道者がそこで黙想するために造られたという。

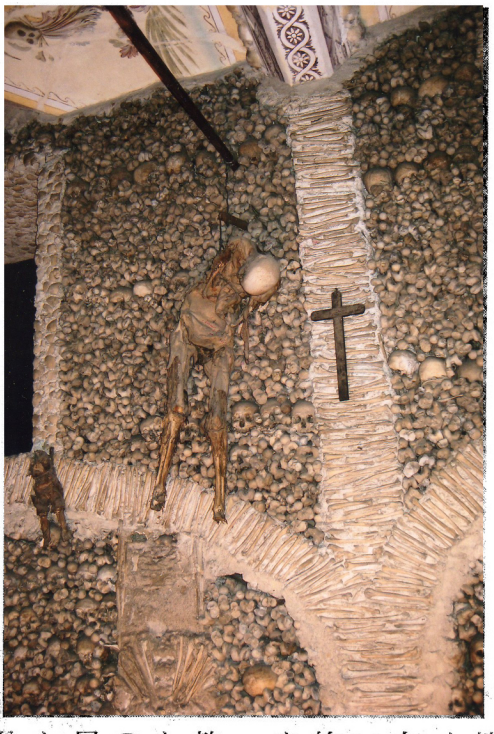
医学、科学が発達した現代社会に生きる私たちは、ややもすれば死を忘れ、死を避けて生活しがちである。

修道者たちは、先人たちの死を通して今の自分がどう生きるべきかを黙想するのだという。

出口のドアの上の壁に「ここにある骨が、あなたを待ってます」と書いてあった。

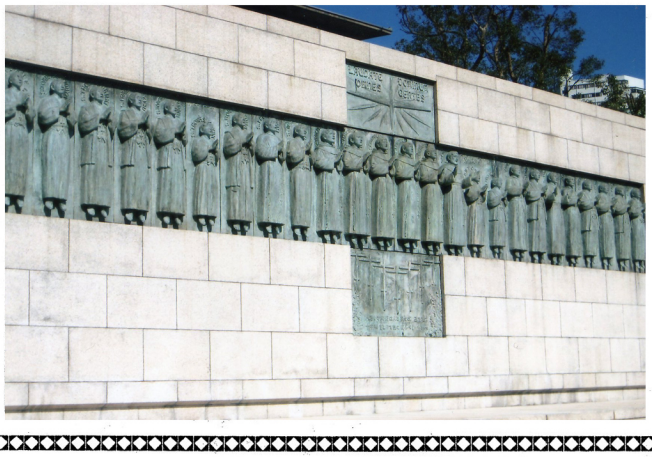
早く来いと言われても困るが、死はだれにも公平に必ず訪れるものであることを忘れずにきょうを生きたいと思いつつエボラをあとにした。

（元山口放送取締役ラジオ局長）


人骨だけで造られた礼拝堂

無名の殉教者がたくさん存在したという歴史的事実がある。

その殉教を、単なる過去の歴史と見ることなく、自分の信仰


長崎26聖人の記念碑